

ヘルパー養成の仕事に携わって

吉川 幸子

横浜市中央職業訓練校

人間は、誕生した瞬間から死に向って歩みつけていく存在である。時間の経過とともにすべての生物は老い、やがて死を迎える。助産婦は人生の出発点である生命の誕生に携わる素晴らしい仕事である。

私は助産婦として14年間働いた後、10余年前、私らずもヘルパーを養成する機関に転職した。

当時はまだ高齢化社会到来への認識が薄く、ヘルパーの評価も主婦であれば誰にでもできる仕事という考え方が大方であった。私も周囲から、助産婦が何故、ヘルパーに関わる仕事をするのかと顰蹙をかった。しかし、年々高齢化が進むにつれ、介護の必要性が重視され、同時にヘルパーの質が問われるようになり、専門職としての知識、技術を持つ介護福祉士などが誕生した。

この社会の趨勢と平行して、日本経済はバブル崩壊の打撃を受け、企業が倒産し多くの失業者が出た。その結果、ヘルパーの仕事にも希望者が急増した。しかし、収入だけが目的なら、ヘルパーより賃金や労働条件の良い仕事は他にいくらでもある。何故、あえてきつくて大変な、しかも、まだ社会的に十分評価されていないヘルパーの仕事を選択するのか。

1つには経済優先社会で多くの犠牲をはらって得た地位や物質的な豊かさが、心まで満たしてはくれなかったという思いを持つ人が増えたことにある。物質的な豊かさより、人間の本来あるべき姿や豊かさ、心の通い合いを求める人たちが増えてきたことを、私は実感する。人々は真の意味での人生のあり方を問いつづけることに価値観を見出しはじめたのである。

このような人材が、それまで培った能力をもつ

て福祉の社会に参入してくることを、私は期待している。そうした人々は、従来の既成概念に染まった視点を変えていく原動力となり、多様化した介護のニーズに応えることができると確信するからである。

翻って、助産婦として活躍された先輩諸姉の最期は幸せであったろうか。苦しい困難な時代を逞しく生き、すばしかった仕事ぶりにふさわしい老後を送ることができたであろうか。寂しく、孤独な人生の幕を閉じた現実遭遇するたびに、胸が痛む。誰にも避けて通れない老いを、最後まで生きていて良かったと思えるような社会をつくっていくことが、われわれ後輩の役割である。

厚生省は、少子、高齢化社会に向けて21世紀福祉ビジョンを掲げた。いわゆる、新ゴールドプラン(高齢者保健福祉推進十か年戦略)および、エンゼルプラン(子育て支援総合計画)である。高齢者が増加する一方、出生率は減少の一途をたどっている。

よい子を産み育てるための支援が、私たち助産婦の今日重要な課題となっている。同時に女性のライフサイクル、特に高齢者の援助、老後のあり方の追究などに関しても、助産婦の役割は、ますます拡大するであろう。重要な責務を担う専門職として、さらなる自覚と研鑽が必須である。

10年前、何故、ヘルパーの養成などするのかと問われたが、今は答えることができるように思う。多様な価値観を持つ人たちが共存していくためには、相手の価値観を大切にす寛容さや理解が何よりも大切である。今の仕事を続けていくことは、助産婦としての視点を変えた1つの関わり方であろうと思っている。